

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 (教育学)	氏名	陳 真
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p>中国人中上級日本語学習者のナラティブにおける評価方略の使用実態 一言語形式と評価対象を中心にー</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教授 畑佐 由紀子 審査委員 教授 永田 良太 審査委員 教授 柳澤 浩哉</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>出来事について語る際、登場人物や語り手の観点や心情を表すことによって、より臨場感のあるナラティブを構築することができる、この語りの方略は評価方略と呼ばれる。本研究では、以下の研究課題を設け、日本語者のナラティブの評価方略を明らかにするとともに、学習者の評価方略の使用実態を解明し、その問題点を明らかにすることを目的とする。</p> <p>研究課題1 客観性、信頼性が高いナラティブにおける評価方略の分類を構築する。 研究課題2 日本語母語話者と中国人日本語学習者において、評価方略の使用頻度と言語形式に違いがあるかどうか、あるならばどのような違いがあるか検討する。 研究課題3 日本語母語話者と中国人日本語学習者において、評価方略の出現位置と評価対象に違いがあるかどうか、あるならばどのような違いがあるか検討する。</p> <p>本論文は、全6章で構成されている。第1章では、学習者のナラティブにおける評価方略の使用における問題の所在と本研究の目的を述べた。第2章では、まずナラティブにおける評価方略とは何かについて記述した。続いて、評価方略の使用実態の分析を扱った先行研究について考察し、中国語と日本語のナラティブにおける評価方略の使用実態について比較した。次に、現時点で明らかになった学習者の使用実態を概観し、本研究の課題を提示した。</p> <p>第3章では、抽出基準と分類基準に注目して、日本語のナラティブにおける評価方略の分類を検討した。その結果、評価節は「話し手や登場人物の態度、立場、感想、観点を表す手段」という定義に基づき抽出し、「心的状態」、「意見表明」、「意図、目的、願望、希望」、「仮説、推測、推論、予測」の4つに分類した。一方、評価表現は、「比較性」、「主観性」、「価値観負荷性」という評価表現の3つの特徴を基準として、これらを含む表現を抽出することとし、「心的状態」、「意見表明」、「発話態度」、「情報補足」、「因果・逆接関係」の5つに分類した。</p>			

第4章では、中国人日本語学習者の評価方略の使用傾向を、使用頻度と言語形式の側面から分析した。その結果、学習者は日本語母語話者ほど評価方略を使用しておらず、学習者の語りには登場人物の視点からの評価節がほとんど見られなかった。また、学習者は感情状態や判断を表す表現と「程度・情態副詞」との共起を含む評価節を多く使用していた。さらに、学習者は情態副詞を用いて、厳しい状況や登場人物間の対立関係を取り上げながら語りを進め、聞き手の共感を求める傾向が示唆された。

第5章では、学習者が用いた評価方略の出現位置と評価対象を分析した。その結果、評価節について、日本語母語話者も学習者も出来事の進行部分において評価節を最も多く使用していた。また、日本語母語話者と比べ、学習者は重要度が異なる場面を評価節によって区別しない傾向が見られた。評価表現について、日本語母語話者は情報の正確さや内容の連続性、物事の結末を述べようとしていたのに対し、学習者は唐突な動作や主人公の達成目標に関心を示していた。

第6章では、各章の研究結果を総合的に分析し、中国人日本語学習者の評価方略の使用実態について考察した。評価方略の言語形式の選択傾向について、学習者は引用節の使用がほとんど見られなかった。また、「程度・情態副詞」で自分の気持ちや観点を強める傾向が見られた。ナラティブの展開の仕方の特徴について、学習者が第二言語でナラティブを語る際には、局部的な内容の言語化に注意が取られ、俯瞰的な視野で物語全体を捉えることが難しい可能性がある。また、学習者はナラティブの展開に沿って評価節で主人公の目標に言及することができないと考えられる。

本研究の結果から、①学習者の語りは一つ一つの場面が切り離されたように聞こえる可能性があるという問題が明らかになった。また、②学習者はナラティブの内容に対する自らの感想、聞き手にとって唐突に聞こえる可能性がある登場人物の動作や目標の達成を促進する動作などを示す傾向が見られた。これらのことから、中国人中上級日本語学習者は談話全体の焦点を際立たせるために、様々な評価方略を効果的に使用するレベルには至っていないとは言えないことが推察された。

本論文はこれまでほとんど検討されてこなかった日本語のナラティブの評価方略を対象としている点、学習者の評価方略を解明しようとした点で新規性に富む。また、先行研究で用いられた分析の恣意性を排除するため分類基準を厳密に定め、妥当性と信頼性を保証した上で、学習者の評価方略の使用実態を解明した意欲的な論文である。本研究で構築された基準は日本語のみならず、様々な言語に用いることが可能である。また、その結果、これまで明らかにされなかった、学習者の語りの問題を明らかにできた点でも学術的意義が高い。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和2年 1月 28日